



Title	札幌農学校予修科・東北帝国大学農科大学大学予科の入学者の志望動機と受験生活
Author(s)	廣瀬, 公彦
Citation	北海道大学大学文書館年報, 16, 1-22
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81439
Type	bulletin (article)
File Information	16_1.pdf



[Instructions for use](#)

< 研究ノート >

札幌農学校予修科・東北帝国大学農科大学大学予科の入学者の志望動機と受験生活

廣瀬 公彦

はじめに

札幌農学校は、1898年5月3日の校則改正により「予修科」を設置した。予修科は、「本科ノ学科ヲ修ムルニ必要ナル普通学科ヲ授ク」ための修業年限2年の課程で¹⁾、「本校予修科ヲ卒業シタル者」は本科へ入学することができると規定された²⁾。1907年、同校は東北帝国大学農科大学となり(勅令第236号、6月22日公布)、「東北帝国大学農科大学官制」(勅令第237号、6月22日公布)により「大学予科」を附属すると定められた。大学予科は「東北帝国大学農科大学ニ入学スル者ノ為メ」の修業年限3年の課程で³⁾、東北帝国大学農科大学の各学科への入学資格の第一位を「本学大学予科ヲ卒業シタル者」と規定した⁴⁾ (本稿では、東北帝国大学農科大学に附属する大学予科を「大学予科」と略し、高等学校大学予科を指す場合は「高等学校」と記して区別する)。

筆者はこれまでに、「札幌農学校簿書」、「帝国大学期簿書」(ともに北海道大学大学文書館所蔵)、『官報』、『文部省年報』、試験問題集等を調査し、予修科と大学予科の入学者選抜試験の実施状況と志願者の出身校等について、以下の論考にまとめた。

- ・「札幌農学校予修科に関する一考察」
- ・「東北帝国大学農科大学大学予科の入学者選抜試験」⁵⁾

その結果、入学試験に関わる規程、定員・志願者・合格者数、試験の日割・科目・合格基準点の一部、願書を綴った簿書の構成等が明らかになった。

本稿では、前稿で十分明らかにできなかった、入学志願者の志望動機と、入学試験の準備から合格発表までの受験生活についてとりあげる。

北海道大学の沿革史には、以下のような言及が見出される。

『北大百年史』部局史(1980年)は、鈴木限三(予修科1903年入学)の志望動機について述べている。

- ・一九〇三年(明治三六)に札幌農学校に入学し、後に予科教授となった鈴木限三は「日本中私の学ぶべき自由の学校は、ここだけと思った。高等学校などは考えたこともなかった」と書いていて、しかも彼は、農学を学ぶ気はまったくなかったとも言っている。彼は内村鑑三の影響を受け、最も純粋に「人の世の清き国」をあこがれた一人であった⁶⁾。

『北大百年史』通説(1982年)では、1899～1905年に予修科在籍者の道外出身者の比率が増加した要因として札幌農学校の知名度の高まりを挙げており、示唆的である。

- ・知名度を高めさせたものとして、札幌の自然や農学校の沿革・校風などを紹介した『札幌農学校』(一八九八年刊)がある。また、農学校卒業生の諸方面での活躍(初期の卒業生である内村鑑三・新渡戸稲造・志賀重昂らは既に全国的に有名になっていた)や、一八九九年から開始された札幌農学校の大学昇格運動も、農学校の学問的な実力や将来の発展性を世に印象づけたであろう⁷⁾。

なお『北大百年史』部局史(1980年)は、道外からの入学者増加について、「一九一二年(明治四五)四月に恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」(横山芳介作詞、赤木顕次作曲)が生まれ、やがて全国に知られる北大の代表歌となり、この寮歌にひかれて、はるばる札幌に遊学する者の数は年を追って増加した⁸⁾」と述べている。

また、山本美穂子氏は、川嶋一郎の志望動機について、以下のように述べている。

- ・東京での遊学中、川嶋一郎は本郷3丁目辺で購入した札幌農学校学藝会『札幌農学校』(1898年)に感銘を受け、1900年6月11日札幌農学校に予修科入学願書を提出した⁹⁾。

本稿では、社団法人札幌同窓会¹⁰⁾の機関誌『札幌同窓会誌』を主な資料とする。同誌は各号に卒業生が在学時の回想や近況の報告等を掲載しており、その中に含まれている志望動機と受験生活についての回想記事に着目する。あわせて、自伝も参照することとする。

本稿の構成は、以下の通りである。

1. 札幌農学校予修科の入学者の志望動機と受験生活
 - 1-1. 志望動機
 - 1-2. 受験生活
2. 東北帝国大学農科大学予科の入学者の志望動機と受験生活
 - 2-1. 志望動機
 - 2-2. 受験生活
 - 2-3. 原田三夫の事例

おわりに

1. 札幌農学校予修科の入学者の志望動機と受験生活

1-1. 志望動機

札幌農学校予修科への志望動機については、8件の記事が該当した。以下、記事に番号を付して引用し、各記事の末尾に『札幌同窓会誌』の記事名、号数、頁数を示す。なお、末尾に付表(付表1、付表2)として、引用した記事の題名、執筆者、予修科・大学予科の入学年、札幌農学校の本科・東北帝国大学農科大学の各学科の卒業学科・卒業年を入学年順にまとめた一覧表を掲げる。

①吉田守一（予修科1901年入学）

私が農学校に入学したのは農学を志望したのではなく、ただ札幌農学校が無精に好きだったからです。父が在札中新渡戸、佐藤、南、宮部などの諸先生と昵懇の間柄であった関係で、諸先生に接する機会が多く、幼いながら諸先生の気品、人柄やその崇高な人格に痛く心を引かれ、またクラーク先生の偉業などを耳にし、一方農学校の学生の気品ある態度などに親しみを感ず、農学校にあこがれをもち父の反対（父は高等学校）を押し切って入学したのです。（「札幌農学校と宮部先生」、復刊号、15頁）

②柳川秀興（予修科1903年入学）

当時[香川…筆者注]県立中学校長河村九淵氏は明治十七年札幌農学校卒業の学士で、英文学に興味深く、新入生徒を講堂に集めて英詩を朗読して聞かせ、これを暗誦せしむるなどをした。後年農学士山田幸太郎、同河南休男諸氏も教師となり、生徒の人望を集めた。（「思い出草」、復刊号、44頁）

③松田友良（予修科1905年入学）

私が札幌農学校へ入学した理由は別に取立てて述べる様な事はありませんが、私は香川県立丸亀中学に入学し当時校長が札幌農学校出身の河村九淵先生と教頭の山田幸太郎先生其の後任河南休男先生と三先生共札幌出身の先生方に教えられた五カ年間の影響があったのでしょうか（「思い出」、第2号、3頁）

①～③は、卒業生と直に接したことを契機とする志望動機である。

①では、父親を介して佐藤昌介（第1期生）、新渡戸稲造、南鷹次郎、宮部金吾（第2期生）という札幌農学校の教授達（新渡戸は1898年に離職）に接する機会があり、人柄や人格に惹かれたと述べる。吉田守一の「入学願書」の「族籍寄留」欄には父親の名はなく、「青年寄宿舍寄留」とある¹¹⁾。青年寄宿舍は、宮部金吾が設立し舎長を務めていた私設学生寮で、上記の縁により入学前から入舎していたのであろう。回想記事中の「農学校の学生の気品ある態度」も、在舎中に接したと推測される。

②と③では、河村九淵（第4期生、1884年卒業）、河南休男（第11期生、1893年卒業）、山田幸太郎（第12期生、1894年卒業）の名が挙がっている。②柳川秀興と③松田友良は香川県立丸亀中学校の卒業生である。河村は、1897年12月～1899年2月頃に香川県尋常中学校長であった¹²⁾が、丸亀中学校との関係は未調査である。山田は1895年12月～1901年2月頃¹³⁾、河南は1901年9月～1903年5月頃¹⁴⁾に丸亀中学校教諭であった¹⁵⁾。

④逢坂信彦（予修科1900年入学）

私が札幌農学校の名を始めて知ったのは、明治三十一、二年、まだ郷里新潟中学の四年頃、摂理の神に導かれて内村鑑三先生の「東京独立雑誌」を読み、又志賀重昂（第四期卒業）の名著「日本風景論」などを聞いた時で、それより札幌を慕って、今から六十有六年前の明治三十三年、時計台へ入学したのである。（「所感」、復刊号、40頁）

⑤鈴木限三（予修科1903年入学）

私が内村鑑三に惹かれて札幌農学校を目ざして入学したことは、度々書きました。内村鑑三が学生時代に、円山の原始林に祈ったり、豊平川畔を神に感謝しながら逍遙したことを、How I became a christian で読んで、札幌に学びたく、第一高等学校などは眼中に無くて、自由の自然に、飛び込みました。(「札幌農学校のなつかしさ」、復刊号、12頁)

⑥小池俊三 (予修科1900年入学)

私ハ和歌山中学ヲ出タノデスガ、郷里奈良県五条ノ新設中学校ニ坂井ト言ワレル英語ノ先生ガ札幌農学校ノ出身ト聞キ、訪ネマシタ処、一見旧知ノ如ク「札幌農学校」ト言ウ会誌ヲ貸シテ呉レマシタ。見マスニ仲々ノ名文デアリ、力ノ籠ツタ内容ハ、札幌ノ環境トソノ学風ヲ知ルニ充分デアリ、即志願ヲ決シマシタ。(「札幌農学校最後ノ卒業」、復刊号、7～8頁)

⑦加藤木保次 (予修科1904年入学)

当時の領事館員 [ホノルルの日本領事館…筆者注] の中に明治三十二年頃札幌農学校の本科を卒業されて外交官になられた岩谷讓吉という方がおられ、私はよくその方から北海道の自然、札幌農学校の事、クラーク博士のお話など、事細かに聴かされたものでした。そのとき岩谷さんから拝借した「札幌農学校」という一冊の本は、北海道の自然や札幌農学校の事などを詳細に書いてあって、それを繰り返し読んでいるうちに、私は急に日本に帰り、北海道に行こうと決心したわけでした。(「遠い昔の思い出」、復刊号、10頁)

④～⑦は、刊行物を読んだことを契機とする志望動機である。

④逢坂信彦と⑤鈴木限三は、内村鑑三 (札幌農学校第2期生) が主筆を務めた『東京独立雑誌』、内村の著書『How I Became a Christian』(警醒社書店、1895年)、志賀重昂 (第4期生) の著書『日本風景論』(政教社、1895年) を挙げている。ちなみに、明治31～32年の『東京独立雑誌』上に内村の署名記事は50編確認でき、『内村鑑三全集』第6巻 (岩波書店、1980年) および第7巻 (1981年) によれば、無署名あるいは筆名による記事も多数認められる。署名記事には、以下のようなものがある。

- ・「カーライルの婦人観」、28号、1899年4月15日
- ・「耶蘇の祈祷と其註解」、36号、1899年7月5日
- ・「余の今年の読書」、52号、1899年12月15日

逢坂もこうした記事に接したはずである。

⑤鈴木が「私が内村鑑三に惹かれて札幌農学校を目ざして入学したことは、度々書きました」と述べたのは、下記の回想を指している。

- ・札幌の不羈奔放の自然と、内村鑑三氏及びその文を通じて知った宮部先生の学んだ札幌農学校なるものが強く私の心をひいた。正直なところ大学の名はきらいであった。“札幌農学校”だから入って来たのであった。日本中私の学ぶべき自由の学校は、ここだけと思った。高等学校などは考えたこともなかった¹⁶⁾。

- ・手っとり早く言うならば、私は札幌の風景にひかされて、北海道へ来たのだ。生れた家にも親類にも、農業に関係のある家は一つもなく、農業で身を立てる志望もないのに、茫漠たる石狩平原や、エルの木の茂る牧草地の香ぐわしき夏のけしきの悠久さに、心をひかされて、知るべのない札幌の学校へやって来たのだ¹⁷⁾。
- ・奔放な北海の自然の中にある覇気に満ちた学校だと思ったので、高等学校などには目もくれず、一途に札幌農学校へ入って来た私は、秋近き九月に津軽海峡を渡りました¹⁸⁾。

⑥小池俊三と⑦加藤木保次は、学校紹介冊子『札幌農学校』（札幌農学校学芸会、1898年初版発行）¹⁹⁾を読んだことを志望契機とする。いずれも、冊子の持ち主は札幌農学校卒業生であった。⑥小池は和歌山県第一中学校在学中に、奈良県五条中学校の英語教師として赴任した坂井菊松が札幌農学校出身と聞き、坂井のもとを訪ねたところ、『札幌農学校』を貸してくれたという。坂井は札幌農学校第13期生（1895年卒業）で、1900年1月～1901年2月頃に奈良県五条中学校教諭であった²⁰⁾。

⑦加藤木は福島県立磐城中学校を16歳で卒業し、上級学校への進学に年齢が足りなかったため、1年間ハワイへ留学した。ホノルルの日本領事館に勤めていた岩谷謙吉から札幌農学校の話聞き、同書を借りた。岩谷は札幌農学校第17期生（1899年卒業）で、1901～1903年に外務書記生としてハワイ領事館に勤務した経歴を有していた²¹⁾。

⑧柳川秀興（予修科1903年入学）

我等の郷里香川県にて北海道への移住熱は高潮に達して居た。（中略）この頃、北海道移住者から金鉱発見の報を為す者あり一方フランス文学者黒岩涙香は萬朝報紙上に、北海道にてダイヤモンド発見されたりと報ずるなどあり、我等の彼地に対する憧れは深まった。（「思い出草」、復刊号、44頁）

⑧柳川秀興は北海道への移住者の趨勢について述べる。当時、道内で金鉱開発が盛んだったことは、新聞記事からうかがえる²²⁾。浅田政広は、「4,000人以上もの砂金掘りが入り、総額で約500貫（1,875kg）もの砂金が採取されたという北見枝幸のゴールドラッシュ期〔明治30年代…筆者注〕を前後して、相継いで金銀鉱山が発見され開発されていった」と述べる²³⁾。雑誌『中学世界』（1902年5月号）の記事「北海道移住者の趨勢」には、「北海道へ移住する者近来大に増加し（中略）上陸地の取扱者の言ふ所によれば前年の二倍なり」という記述もみられる²⁴⁾。

予修科への志望動機については、内村鑑三と志賀重昂の著作、『札幌農学校』が挙げられている。『札幌農学校』の持ち主として、あるいは影響を受けた中学校教師として卒業生の名がみられ、札幌農学校卒業生による学校紹介が一定の役割を果たしていたことがうかがえる。一方で、北海道への移住者の趨勢も、札幌を目指す契機となりえたと思われる。

1-2. 受験生活

札幌農学校予修科の受験生活については、2件の記事が該当した。

⑨小池俊三 (予修科1900年入学)

入学試験場ハ東京神田ノ外国語学校デ、試験係ハ時任先生(後ニ承知)デアリマシタ。

(「札幌農学校最後ノ卒業」、復刊号、8頁)

⑩加藤木保次 (予修科1904年入学)

明治三十六年日本に帰り、入学の準備にかかり、翌三十七年の春入学願書を札幌農学校へ差し出しました。当時の我国は、日露戦争の真最中で、私なども毎日新聞で戦況を心配しながら、入学試験の準備をしていたのでした。しかるに同年六月三十日附で札幌農学校から突然次の様な入学許可の吉報が七月五日に参りました。

札幌農学校指令第三六号 加藤木保次

本年九月十一日ヨリ予修科第一年級へ入学ヲ許可ス但シ九月十一日午前八時半出校スヘシ

明治三十七年六月三十日 札幌農学校長 農学博士 佐藤昌介

入学試験も受けないうちに、入学を許可された事は、当時の校則で、私の中学卒業の成績がよかったためだと後で聞いて喜んだ次第でした。(「遠い昔の思い出」、復刊号、10頁)

⑨では1900年の入学試験のことが短く記述されている。同年の5月3日付『官報』「生徒募集」記事では、「本年七月九日午前八時ヨリ本校及文部省内ニ於テ施行ス」とあったが²⁵⁾、実際には文部省直轄学校であった東京外国語学校(東京市神田区錦町)²⁶⁾で実施されたとみられる。東京会場には時任一彦助教授が試験監督官として派遣されたとある。

⑩では、ハワイから帰国した加藤木が試験の前に無試験での入学許可を受けたことが記されている²⁷⁾。校則には、中学校卒業者と専検合格者に入学資格を与える旨があるのみで、無試験入学については規定されていない²⁸⁾。1904年5月9日付『官報』「生徒募集」記事において「但シ中学校長ヨリ優等生タル証明アル者ハ人員ヲ限り無試験入学ヲ許スコトアルヘシ」²⁹⁾とあるところに拠ったものと考えられる。

また、1904年の入学試験日程は、5月9日付『官報』に「生徒募集」記事が掲載され、出願期日は6月15日、試験は7月8日より「札幌本校、東京文部省内及各府県庁(東京府ヲ除ク)」において実施するというものであった³⁰⁾。「入学志願者名簿」(教務部、1904年5月)によれば、出願書類は5月14日から6月20日にかけて受理された(末尾に7月4日受理が1件あるのは例外とみなされる)³¹⁾。⑩の記事により、6月30日付で無試験入学の許可がなされたことと、郵送された通知が試験日の3日前に手元に届いたことが分かった。

試験会場については『官報』に「文部省内」と発表した上で、具体的な場所は受験票と共に志願者に伝えられたとみえ、文部省直轄学校である東京外国語学校が会場となっていたことが分かった。また、無試験入学の許可通知は未見であり、内容が記事中に引用されたことにより、試験日程における無試験入学許可の日付を知ることができた。

2. 東北帝国大学農科大学大学予科の入学者の志望動機と受験生活

2-1. 志望動機

東北帝国大学農科大学大学予科への志望動機については、17件の記事が該当した。

⑪小笠原亀一（予科1915年卒業）

私は大正四年青森県八戸中学を卒業し、郷土の大先輩新渡戸博士の人格を慕い、同氏出身の札幌農大を志望し幸に合格した（「在学当時の思出」、第2号、56頁）

⑫村越信夫（予科1915年入学）

明治四十二、三年の秋だったかと覚えている。その当時一高の校長だった新渡戸稲造先生が小田原中学にきて十代のわたしたちに講話をなさった。（中略）小田原中学を卒えて東京の予備校時代にはたびたび先生のお話を本郷中央教会でうかがった。それ以来先生の母校である札幌にあこがれた。（「あこがれの札幌」、第3号、39頁）

⑬滝山三馬（予科1907年入学）

日本最西端の平戸中学、猶興館に入学した当時の博物の先生は、札幌農学校出身の清水元太郎先生だった。この先生は外套を着たまま教壇に立ち、野外教授の時など、次の時間もかまわず二キロも離れた郊外で解散する。下宿では読みさしの洋書を、部屋一杯に取り散らかしたままの起居。いかにも、自由奔放な先生に魅せられ、ひそかに札幌農学校に興味を覚えたのだった。偶々、セシルローズの伝記を読んで、海外で仕事をして見たいという素地もあり、遂に札幌農学校を志したのだった。（「思い出のまま」、第4号、20頁）

⑭加納瓦全（予科1915年入学）

私は札幌に生れ札幌に育ち、小学校は北九条中学は札幌一中であった。家は北十三条にあったが、今日とちがって到るところに小供の遊び場があり、その最たるものは農大のキャンパス、農場をバックにした一帯で、この環境のなかで、少年時代が楽しく過ぎて行った。

小学五年頃か、兄が役人生活から一転して乳牛を飼い牛乳販売業を始めた。

中学では札幌農学校出身の山田幸太郎先生が校長、大変温厚な好紳士で、前記の環境と相まち、なんとなく農大に親しみをおぼえるようになった。一方、家の一町ほど南のこんもり茂った森の中に基督教青年寄宿舎があり、毎日牛乳を配達しているうちに多くの寮生になじみ、いろいろ世話を受れたり、学校の様子を聞かされたりした。林学の川田繁次郎、畜産の花島周一、プロパーの市島吉太郎、戸野琢麿、野田幸猪兵頭さんなどで、そんな雰囲気の中で私の予科入学へのレールが自然に敷かれていったように思う。（「昔を偲んで」、第2号、50～51頁）

⑮田中次郎（予科1910年入学）

私の父渡瀬寅次郎は札幌農学校第一期の卒業でクラーク先生に直接薫育を受けた一人である。叔父の渡瀬庄三郎は第四期の卒業で後東大理学部を終え動物学を専攻し東大

の教授となった。そういう訳で私は北大とは縁故も深く、父も私の札幌入学を喜んでおり、昔からの親友であった宮部金吾先生に私のことを頼んでくれ、私も屢々先生のお宅に出入りした。(「学生生活の思出」、第3号、14頁)

⑩足立仁 (予科1915年卒業)

ほとんどが一高二高あたりに進む傾向の強かった東京の開成中学から札幌しか受験しなかった自分は早く死なれた父の母校で子供心に憧れていた一つの新天地をめざしてまず父のあとをつがれて当時分類学の大家として名をなされておった昆虫の松村先生の門をたたいたものである。(「古い時代を顧みて」、第3号、42頁)

⑪～⑯は、卒業生と直に接したことを契機とする志望動機である。

⑪と⑫は、志望の契機となった人物として新渡戸稲造(札幌農学校第2期生)を挙げる。

⑬小笠原亀一は出身地の先輩として、⑭村越信夫は小田原中学校および本郷中央教会での講演を聴き、新渡戸の母校を志望した。

⑮～⑯は、中学校教師が卒業生だった例である。⑮滝山三馬が長崎県立中学猶興館に入学した1899年³²⁾に博物学教師であった清水元太郎の自由奔放さに魅せられたという。清水は札幌農学校第14期生(1896年卒業)で、1898～1900年に県立中学猶興館教諭であった³³⁾。

⑯加納瓦全は、母校である庁立札幌中学校において、校長の山田幸太郎の温厚さに惹かれたという。山田は②と③で触れた通り第12期生(1894年卒業)で、1908～1937年に札幌中学校校長を務めていた³⁴⁾。また、加納は牛乳配達先の青年寄宿舎で舎生達から世話を受けて学校の様子を聞かされたりしたという。引用文中の各学生は、米田繁次郎(林学科1913年卒業)、花島周一(畜産学科第一部1918年卒業)、市島吉太郎(農学科第一部1915年卒業)、戸野琢磨(農学科第一部1916年卒業)、野田幸猪(農学科第一部1917年卒業)、兵頭正俊(1912～1914年農学科第一部在籍)として、それぞれ確認できる。

⑮と⑯は家族に関わる志望動機である。

⑮田中次郎は、父が渡瀬寅次郎(札幌農学校第1期生、1880年卒業)、叔父が渡瀬庄三郎(札幌農学校第4期生、1884年卒業)という縁故があった。

⑯足立仁の「入学願書」の戸主欄は空欄で父親の名が確認できない³⁵⁾。札幌同窓会会報の訃報記事には、1912年に54歳で死去した足立元太郎(札幌農学校第2期生、1881年卒業)の長男が「仁氏神奈川県第一中学校三年生」とある³⁶⁾。⑯の足立仁は私立東京開成中学校1915年卒業であり、同一人物と推定される。入学願書の戸主欄が空欄であることも、父親が既に他界していたことと関わるのかもしれない。

⑰須藤直吉 (予科1917年入学)

父が北海道の洞爺湖畔と天北原野のパロマウツワナイ川流域に農場を持っていたためもあって、大正六年九月の秋、東北帝国大学農科大学予科に入学した。(「久闊の札幌行とクラーク訓話の討究」、第3号、58頁)

⑱田中勝吉 (予科1914年入学)

明治、大正を通じ著名の実業家増田義一氏（故人）が札幌を見、北大を視察した際、真に学問をする処は正にここだと嘆声を洩らしたというのがさも有りそうなことである。鬱蒼たるエルムの樹蔭、静かな Umgebung は氏を魅了したに相違ない。それで僕が北大を志した動機は増田氏の発言と直接関係なく中学三年の時年若い英語教師（細江逸記氏、後年文博、わが国屈指の英学者、シェークスピア研究の大家）が教壇から「Boys, be ambitious の声未だ消えやらぬ札幌の学園こそ諸子の行く手の一つであろう」とえらく詩的に呼び掛けられた。僕の北大志願はこの数語で固まっていった。

（「alma mater 北大農学部思い出」、第2号、48～49頁）

⑰と⑱は、卒業生以外の家族や教師と接したことを契機とする志望動機である。

⑰須藤直吉は父親が北海道に農場を営んでいたという。「入学願書」には「須藤善一郎養子」と記されている³⁷⁾。須藤善一郎は、人名辞典によれば馬の繁殖・改良を手がけ、秋田県畜産会長、衆議院議員、本荘町長等を歴任し、「北海道への開拓支援も行い、資金を投じて農民を入植させた」³⁸⁾人物である。

⑱田中勝吉は、大阪府立北野中学校の3年次に英語教師であった細江逸記（東京外国語学校1906年卒業）³⁹⁾から東北帝国大学農科大学を推された。

⑲茅原太治郎（予科1908年入学）

明治四十年頃の英語世界に札幌農学校は単なる農学校でなく、人材を造る学校であるとの記事を見て想いを致し（中略）四十一年に予科へ入学、大正三年農学科を終えた。

（「思いでるまま」、第2号、10頁）

⑳滝山三馬（予科1907年入学）

日本最西端の平戸中学、猶興館に入学した当時の博物の先生は、札幌農学校出身の清水元太郎先生だった。この先生は外套を着たまま教壇に立ち、野外教授の時など、次の時間もかまわず二キロも離れた郊外で解散する。下宿では読みさしの洋書を、部屋一杯に取り散らかしたままの起居。いかにも、自由奔放な先生に魅せられ、ひそかに札幌農学校に興味を覚えたのだった。偶々、セシルローズの伝記を読んで、海外で仕事をして見たいという素地もあり、遂に札幌農学校を志したのだった。（「思い出のまま」、第4号、20頁）

⑲と⑳は、刊行物を読んだことを契機とする志望動機である。

⑲茅原太治郎の読んだ『英語世界』の記事は、次に掲げる「英語教育上記憶すべき札幌農学校」（『英語世界』第2巻第4号、1908年4月）であろう。

札幌農学校が幾多の農学士を造つて日本の農界に尽したことは鮮少でなからう、而も亦同校から秀抜な英学者を輩出して日本の英学界に尽した功績の少からぬに至ては殊に一言の要を認める⁴⁰⁾。

⑳滝山三馬は、イギリスの植民地行政官セシル・ローズ（Cecil John Rhodes、1853-1902）の伝記を読み、海外での仕事に就くことも考えて志望したという。

㉑福山伍郎 (予科1911年入学)

一九一一年明治末期、札幌農学校の校風にあこがれて津軽の海を越えて以来既に五十余年が過ぎ去った。(「札幌遊学 半世紀の思い出」、第2号、23～24頁)

㉒北島敏三 (予科1916年入学)

大正五年第一次世界大戦の最中、校風を慕って予科に入学し、大正十一年戦後の不況時代に農芸化学科を卒業した(「同窓生の思い出」、第4号、85頁)

㉑福山伍郎と㉒北島敏三は、校風を志望動機とする。学校紹介冊子『札幌農学校』には各所に「学風」が述べられており、秋月俊幸は同書をもって「札幌農学校の校風観を完成したとみることができる」とし、「農科大学、北海道帝国大学となったのちでも、自校の校風をのべる際には本書は常に座右の書となったのである」と述べた。その上で校風観を「勤勉朴直」「学生の自主性」「師弟の関係の親密なこと」「校友の親睦なること」「精神的修養」の5点にまとめた⁴¹⁾。福山と北島の憧れた「校風」も、上記のようなものであったと思われる。

㉓高木亮 (予科1908年入学)

私は明治四十一年に中学を卒業したが、四年生の頃から田園の生活に撞れ、是非とも札幌農学校に入学したいと考え出した。郷里熊本には五高^{ゴウ}があり。中学同級生の主なるものは殆ど同校に入り、東大京大に進んだのだったが、しかし私には「大学」という考は毛頭もなかった。当時まだ広大な未開地を持つ北海道に将来理想の大農場を開きたいという一念に燃えていたのでした。(「溝淵先生を偲ぶ」、第2号、9頁)

㉓は、自身の将来像に関わる志望動機である。

高木は北海道での大規模農場経営を夢みて渡道した。1911年に農科大学の農業経済学科へ進入し、1913年の夏に道内の農牧場や小作農家を実地調査した。その結果、農場に適した土地は既に残されていないことが判明し、卒業後は北海道移住を断念して郷里へ帰ったという。

㉔堰八愛勲 (予科1909年入学)

別に大きな志望があった訳ではなく、道産児である私が札幌中学生であったため、御隣りの大学へ進学したに過ぎなかったのである。(「つれづれなるままに」、第2号、14頁)

㉕小林直材 (予科1912年入学)

抑も札幌は私の故郷なのだ。大学の前身札幌農学校がまだ町の中にあり、あの時計台をすぐ目前にして育ったから童心にも大きくなればこの学校に入るものと思いついていたようだ。後年父からも勧められて入学出来た喜びは真に胸の高鳴るのを覚えた。

(「尽きぬ思い出と感謝」、第4号、61～62頁)

㉖西佐久一 (予科1914年入学)

小学校は当時創成高等小学校に通学していたのでありますが、当時植物園には門がありました。扉がなかったので屢々北側の門より入り正門をぬけて通りました。新緑した例年五月に農科大学文武会主催の運動会が(中略)遊戯会という名で開催され、これが大学のみならず中等学校小学校更には札幌市の風物詩であり、代表的な年中行事と見なされておりました。植物園の北側の平地に楕円形の道路がありそれを利用して大学の学生生徒も中学生も時に小学校の生徒もランニングの練習をしておりまして私も、小学校生徒のころ有機質の黒土をふんで走った事をなつかしく思い出します。中学校は当時の北海道庁立札幌中学校に入学しましたので、西十一丁目の鉄道踏切りを通り、農科大学の暖房のボイラーをたいている付近を通り過ぎ、右手に池を眺めながら当時の林学講堂前を通り、橋を渡って大学正門を通過して通いました。斯様な次第で私にとっては、農科大学予科入学以前より只今の北海道大学とは浅からぬ因縁があったと言えましょう。(「北大とのかかわり—明治—大正—昭和の八十年—」、第6号、1～2頁)

㉗加納瓦全（予科1915年入学）

家は北十三条にあったが、今日とちがって到るところに小供の遊び場があり、その最たる者は農大のキャンパス、農場をバックにした一帯で、この環境のなかで、少年時代が楽しく過ぎて行った。(「昔を偲んで」、第2号、50頁)

㉔～㉗は、幼少期から東北帝国大学農科大学がごく身近だったことを契機とする志望動機である。

㉕小林直材は、札幌農学校が北1条キャンパスにあった時分から親しんでおり、いずれこの学校に入ると意識していた。

㉗加納瓦全も、大学キャンパスが幼少期からの遊び場となっていたと述べる。

㉖西佐久一は、創成高等小学校への通学に植物園を通っていたこと、文武会主催の遊戯会が札幌市の風物詩であったこと、植物園内でランニングの練習をしたこと、札幌中学校への通学に大学構内を通ったことを詳細に綴っている。

㉔堰八愛勲は札幌中学校（1909年当時は北10条西4丁目に位置⁴²⁾）を卒業して「御隣りの大学へ進学した」と述べる。

2-2. 受験生活

東北帝国大学農科大学大学予科の受験生活については、10件の記事が該当した。

㉘板垣信之（予科1912年入学）

その頃は上級学校、特に官立学校に志願する者は余程成績のいい者に限られていた。

(「その頃の学徒たち 強情な弘前の人」、第2号、31頁)

㉙服部正相（予科1910年入学）

中学時代余り遊び過ぎ成績の芳しくなかった私は、学校を出ると猛烈に勉強し、その効あってか中位で入学出来たことは幸なことであった。(「思い出づるまま」、第2号、

16頁)

⑩滝山三馬 (予科1907年入学)

明治三十九年中学卒業の年、熊本での入学試験に失敗、直に上京、明治大学の予備校に入り入試準備に取りかかったが、ここで夏目漱石、内海月杖の講義を聞いたのは思わぬ収穫だった。翌四十年、東京での入試に合格し、札幌に向うことになった。(「思い出のまま」、第4号、20頁)

⑪大沢正之 (予科1913年入学)

明治四十五年中学を卒業した私は、八高の入学試験に失敗したので、翌年の入学試験期まで明治大学の予備校に籍をおき、所謂浪人生活を味わった末、再度の高等学校の受験に間違いなく合格する自信も持てなかったのが、安全策として高等学校以外の学校を受験すべく選んだのが、札幌農学校を前身とする東北帝国大学農科大学予科であり、首尾よく合格した。(「札幌農学校と神中」、復刊号、31頁)

⑫～⑬は、入学試験までの受験勉強期間に関わる記事である。

⑫板垣信之の述べるように、上級学校への進学はごく限られたものであった。『中学世界』(1912年8月号)は「本年の競争受験界」を特集し、官立諸学校(高等学校、高等商業学校、高等工業学校、医学専門学校、農科大学予科実科、高等師範学校、高等農林学校、工学専門部、医学専門部、東京外国語学校、上田蚕糸専門学校、秋田鉱山専門学校)について、募集人員5,023名に対し、志願者総数を約24,000名と試算し、「その競争状態の容易ならぬを相察することが出来る」としている⁴³⁾。

本稿で扱う1898～1917年の学校暦は、中学校を3月に卒業し、大学予科や高等学校等の入学試験が7月頃、入学が9月というものであり、⑭服部正相が述べるように、入学試験の準備期間は4～7月であった。このことは、中島広吉(林学科1913年卒業)が出身校である札幌中学校の後輩に宛てた文章からも裏付けられる。

四月より七月までとは、中学を卒業して高等の学校の入学試験を受くる迄の間にして、受験準備の時なりとす。換言せば、五ヶ年を真面目に送りし者が、其五ヶ年間に蓄積せし学力を、如何に纏めんかと苦心するの時にして、亦た、五ヶ年間をエスケープとカンニングを以て送りし者が、如何にして五ヶ年の課程を三ヶ月に速成せんかと周章するも此時なり⁴⁴⁾。

⑩と⑪にみられるように、上京して予備校に入校する者もいた。⑩滝山三馬、⑪大沢正之は明治大学内の明治高等予備校に籍をおき、滝山は夏目漱石と内海月杖の講義を受けたという。明治高等予備校は「高等ノ諸学校ニ入学スルニ必須ナル高等ノ普通教育ヲ授ク」ための修業年限1年3ヶ月の課程であり、1912年の「明治高等予備校学科及担任講師」として国語担当に内海弘蔵(号月杖)の名が確認できる⁴⁵⁾。

⑪大沢は、高等学校のかわりに大学予科を受験したとしているが、併願する志願者もいたようである。大学予科主任の渡辺又次郎は雑誌『中学世界』(1916年10月号)に記事を掲載し、次のように述べている。

吾大学予科（中略）の期日は高等学校大学予科の選抜試験の期日よりも必ず早くすることにしている。（中略）吾大学予科の試験期日が早い為、高等学校大学予科の入学試験の力試しに試験を受けて見るやうの学生があるらしい。（中略）若し真に力試しであるならば、此方で成績を発表した時に合格者の中にあつたらば、直に入学取消を願出づべきものだと思ふ。然るに受験者の中には二心を持つて居て、高等学校の入学者に決定を見てから吾大学予科の入学を取消さうと思つて居る者が多少はあるやうに見える。併しそれは省令に背くので、不都合の事である⁴⁶⁾。

渡辺は高等学校の力試しとして大学予科を受験することは志願者の自由であるが、大学予科から受けた入学許可を取り消さない場合は、「省令」に基づいて大学予科へ入学することになると述べる。「省令」とは1903年4月30日の文部省告示第96号を指す。

同一人ニシテ文部省直轄諸学校中ノ二箇以上ノ学校ニ入学ヲ出願シタル者ハ其ノ最前ニ入学ヲ許可セラレタル学校ニ入学スヘキモノトス。但シ同時に二箇以上ノ学校ニ入学ヲ許可セラレタル者ノ入学スヘキ学校ハ本人ノ選択ニ任ス⁴⁷⁾

高等学校も東北帝国大学農科大学も官立であったため、大学予科と高等学校の併願は可能だが、先に試験を施行し入学許可者を発表する大学予科に合格した場合は、そのまま大学予科に入学することになる。『中学世界』（1915年3月号）に、東北帝国大学農科大学予科と第一高等学校を併願した場合についての質問と回答が掲載されている。質問は、大学予科から入学許可を得た後に第一高等学校からも入学許可を得た場合、高等学校に入学するために必要な手続きは何か、というものである。対する回答には「先きに入学許可された農大をやめて、後に発表になつた一高に入学するといふことは出来ぬ」とあつた⁴⁸⁾。

③②西田近太郎（予科1911年入学）

入学試験は東京の第一高等学校の教室、試験官は有島武郎、森本厚吉両先生。（「ライオンクラス」、第2号、32頁）

③③須藤直吉（予科1917年入学）

入学試験も六月ごろであつて自分は東京で受験し、入学式は九月十一日であつた（「久闊の札幌行とクラーク訓話の討究」、第3号、58頁）

③④権平昌司（予科1917年入学）

その頃は三月末に中学を卒業して、六月に大学予科の入試を東京で受ける生徒が多かつたのです。（「エルの森の思い出」、復刊号、46頁）

③⑤高木亮（予科1908年入学）

三月中学を卒業するや否や、早速忘れもせぬ三月十七^マに単身札幌に向つた。当時熊本駅では札幌までの直通切符は出来てなく（中略）大阪、京都、東京を大急ぎで見物して、五月二三日頃札幌着。大通りの小さな旅館に二三泊して、宮部先生が舎長だった青年寄宿舎に入舎した。そして七月受験入学した（「溝淵先生を偲ぶ」、第2号、9頁）

③②～③⑤は、入学試験当日に関わる記事である。

㉔西田近太郎は、試験会場を第一高等学校、試験官を有島武郎と森本厚吉と回想している。試験会場は『官報』「生徒募集」記事に「本大学（札幌）及第一高等学校（東京）」と示されていた⁴⁹⁾。英語の試験は英文解釈、和文英訳、英文書取から成っており、㉔の事例では有島武郎、森本厚吉が英文書取の問題を読み上げたと推察される⁵⁰⁾。

㉕権平昌司が述べるように、札幌と東京に設けられた試験会場のうち、東京を選択する志願者が圧倒的に多く、1907～1917年の間では8～9割を占めていた⁵¹⁾。一方で、㉖の高木亮は中学校卒業の直後に熊本から札幌へ来ており、受験までの期間は青年寄宿舍に在舎した⁵²⁾。㉗の吉田守一も入学願書に「青年寄宿舍寄留」とあり、札幌中学校4年次から在舎していた戸野博もいた⁵³⁾。

㉘加納瓦全（予科1915年入学）

大正四年の入学で、運よく無試験で入れてもらえた。一中からは十名合格し、病没や転向^{マツ}の二人を除き皆卒業の栄を勝ちえた。（「昔を偲んで」、第2号、51頁）

㉙板垣信之（予科1912年入学）

私は東北帝大予科に志願し一番で入学を許可された。後ろから一番だった私が一番で入学したのだから皆が驚いた。官報を見て私自身も驚いた。官報は「イロハ順」で発表したのだからイの一番だったのだ。（「その頃の学徒たち 強情な弘前の人」、第2号、31頁）

㉘と㉙は、合格発表に関わる記事である。

㉘加納瓦全は無試験入学であった。これは、1910年5月14日に高等学校に対して定めた「高等学校大学予科入学者選抜試験無試験検定規程」（文部省令第11号）を適用する形で、1911年に東北帝国大学農科大学の「大学予科規則」を改正したことによるものである⁵⁴⁾。

㉙板垣信之は、入学許可者が『官報』にイロハ順で掲載されたと述べる。㉚服部正相が「中位で入学出来た」と記しているのは、『官報』の入学許可者100名中64番目⁵⁵⁾に載ったことによるものとみられる。原田三夫（大学予科1907年入学）は『官報』の1番目に掲載され⁵⁶⁾、首席入学であったと回想している⁵⁷⁾。前稿において、掲載順を1907～1911年は成績順、1912～1915年はイロハ順、1916～1917年は五十音順としたことが裏付けられたといえる。

2-3. 原田三夫の事例

原田三夫（1890-1977）は、1907年に大学予科に入学し病を得て1910年に中退、第八高等学校を経て東京帝国大学理科大学を卒業し、『科学画報』や『子供の科学』など科学普及書や児童科学雑誌を多数著した科学評論家である。1919～1920年には北海道帝国大学附属水産専門部講師を務めた⁵⁸⁾。

自伝『思い出の七十年』（真文堂新光社、1966年）の自序において、同書刊行の意図を以下のように述べている。

私の自叙伝は一般の人が読もうとするかどうかはともかく、雑誌や著書を通じて私

に親しみを持った読者、とりわけ少年時代に読者であって、私のその後を見守っていて、親愛感の深くなった人人のなかには、興味を持って読んでくれる人が少なくないと思った。

しかし私は、ただ面白いから読んでもらうとするのではない。私が校風を慕って入学した札幌農学校は、その年から北大の前身、札幌農科大学となり、私はその第一回生となって二年在学したが、そのとき北海道の大自然と有島先生の薫化によって啓発された思想が、その後、つねに自然と人生を考察するあいだに徐々に発展し、五十余年ののち、ついに実を結んだ。私の自叙伝の眼目は、旧師への謝恩、友情に対する感謝、悪業の懺悔とともに、この思想の結実を伝えることである⁵⁹。

愛知県名古屋市に三人兄弟の末子として生まれた原田は、名古屋市立第四高等学校を経て愛知県立第一中学校へ進学した。大学予科への志望の契機を、以下のように述べる。

家にもどると〔原田は中学第4年級の時に養家から離縁された…筆者注〕盛んに読書をするようになった。そのうちで徳富蘇峯の「静思余録」、大町桂月の「青年訓」が記憶に残っている。雑誌は「中学世界」の論説を好んで読んだ。読書によって私は人生を考えるようになったが、「中学世界」の木村という人の論説に「男子一度世に落ちては、震天動地の大事業をなすべし」とあったのに感激して、大野心が胸に燃えだした。志賀重昂の「日本風景論」は、私には宝物のようなものであったが、その志賀が、ある雑誌で日本は山国である上に、わずかの耕地も年々土壌の肥料分が海に流されて痩せてしまう。国民が海外に出かけて未開の地を開拓して食料を求めなければならぬと説いた。私は成るほどと思い、五年生になると、南米に渡って植民王になろうとした。そこで志賀が、札幌農学校の出身であることも手伝って、私は同校に入学を決したのである。

もっとも札幌農学校については、前から理科の松原愛治郎先生から、しばしば聞いていた。それが美しい原始的な環境にあること、師弟の情愛が濃かであること、多く的人格者を出していることなどで、同校は私に魅力のあるものとなっていた。松原先生は、同校は農学校といっても、何でも好きな研究ができるといったが、それならば私の好む植物の研究もできると思った。しかし、そこへ入学することはあきらめていた。父の死後、家計が豊かでなく、中学以上の学校へは、やってもらえないと思っていたからである。

いまや野望に燃えるとともに、札幌農学校入学の決心は動かぬものとなった。私は母と兄にそれを語ったが、母は第一、可愛い三男坊を、熊が住む北海道にやるのを好まなかったし、上の兄ともども学資も出せないといって反対し、それよりも父の遺志に従って軍人になれといった。明倫中学を出た下の兄が、海軍兵学校の入学試験に失敗したからであった。

そこで私は思いきって日比野寛先生を校長室に訪れて右の事情をのべ、何とか方法を考えてもらえぬかと頼んだ。校長というものは、人間をよく見ぬくもので、それが

できなければ英才を養うことはできない。日比野校長が、そのとき私の腹を見ぬいたかどうかはわからないが、それよりも一つづきのことがあった。

私は五年生になって野心がますます燃えると、大事業を達成するには、弁論にすぐれなければならぬと考え、当時振わなかった弁論部を盛んにしようとした。そして日比野校長を説き伏せて、全級の生徒が一人残らず、演壇に立つ演説会を、月に一回開かせることにした。その講演で、私は志賀重昂の請け売りに熱弁をふるったが、それを校長が聞いていて、私の固い決心を、すでに知っていたのだと思う。

日比野校長は柔和な容貌が野趣をおび、少しも飾り気がなく、いつも粗末な紋付羽織を着、袴をはいていたが、どこかどっしりしたところがあった。しかしじっと見つめる優しい茶目には、無限の愛情がこもっていて、つい甘えたくなった。私の申入れを聞いた校長は、ちょっと考えただけで自分の友人が北海道で農場をやっているから、それに学資を出してもらおうように頼んでやろうといった。私は小躍りして校長室を出た。

いく日かたって、校長室に呼ばれると、八字ひげのいかめしい大兵肥満の紳士がいたが、それが農場主であった。紳士は一こと二こと私に話しかけた。人物試験をしたのであろうが、すでに校長が保証して話はきまっていたのである。この紳士は愛知県の刈谷に近い平坂の豪農石川錦一郎氏で北海道の八雲の次の山崎に大農場を経営し、夏のあいだはそこにいたことをあとで知った。家へ帰って母と兄に話して許しを乞うと、母は私が遠い北海道へ行くことを悲しみながら、不承無承に承知した⁶⁰。

受験当日から合格発表までの箇所を引用する。

明治四十年（一九〇七）七月のある日の朝、十七才の私は、浅草の蔵前にあった東京工業大学の前身東京高等工業学校の大講堂の前に立っていた。入口に「札幌農学校入学試験場」と大きく書いた紙がはってあって、前の広場には受験者がおおぜい集まり、三三五五かたまって話をしているものもあった。その群の一つに、中学を私の一、二年前に卒業した先輩の顔が見えた。前年高等学校の入学試験に落ち、高等学校をあきらめて、志願者の少ない札幌農学校を志したのだと思った。しかし札幌農学校は、その年の九月の新学期から、仙台の東北帝国大学の分科大学となって札幌農科大学と改名され、私どもはその第一回の予科生として募集されたのだから、志願者は例年のように少なくはなかった。募集人員百人に対し、志願者が五百人ぐらいあったことを、のちに知った。

その日は快晴で、東京の空のあちらこちらに雲の峯が立ちかけ、ま昼の暑さを思わせた。試験の時刻がせまると、一台の人力車が威勢よくやってきた。乗っていたのは白い麻の服を着た、金縁眼鏡の立派な紳士で、扇子を使っていた。試験官の親玉だと思った。

試験が始まると、この親玉の紳士は、願書にそえた受験者の写真と顔とを、いちいち見比べてまわったが、私の前では、とくに写真を私に示して「これですか」といっ

た。私は特別待遇をされたように思って嬉しかった。実物が写真と似ていなかったのかもしれないが、そのときは、そんなことは考えなかった。そしてその紳士の容貌といい風采といい態度といい、何となく敬愛の念を私の胸に湧かせた。これこそ、のちに私がひとかたならぬ恩顧を受けた札幌農学校出身の同校教授宮部金吾博士であった。

ところが答案のできばえは、いいとは思われなかった。英語の試験に和文英訳で「あの男はいわばシミのような人である」という題が出たが、このシミが書物を食う昆虫であることは知っていたが、シミの英語は知らなかった。しかたがないから、an insect which eats book とやったように記憶する。他の問題はどうかできたように思ったが、この一つで落第だと悲観した。

私はとうていパスしないだろうと、あきらめていたが、ともかくも、母校の高等小学校へ行って入学許可になった氏名の出ている官報を見た。すると百人の入学者の筆頭に私の名がある。夢かと驚ろいたが、すぐに成績順でなく、ほかの何かの順になっているのだらうと思った。まさか私が五百人の志願者から選ばれた百人の首席とは思われなかったからである。しかし、そうであったことが、あとでわかった⁶¹⁾。

杉山滋郎は、「原田三夫（一八九〇—一九七七）は、札幌農学校が北海道帝国大学に昇格した一九〇七年に、農学校の「校風を慕って」予科に入学する。首席だった」と述べている⁶²⁾。病を得て大学予科2年次に中退を余儀なくされたにもかかわらず、『思い出の七十年』において、大学予科在籍中の回想に、第八高等学校や東京帝国大学理科大学より多くの頁を割いている。上に引用した志望動機、受験会場や合格発表の様子についての記述は他に類を見ないほど精緻を極めており、貴重な資料といえる。

おわりに

札幌農学校予修科と東北帝国大学農科大学大学予科の志望動機と受験生活について、『札幌同窓会誌』に掲載された33名（37件）の回想記事と原田三夫の自伝を資料とした。『文部省年報』に記録の残る1900～1917年の予修科、大学予科入学者の総数1,460名に比して、知りえた例はごくわずかである。しかしながら、それらから以下の諸点を確認できる。

予修科への志望動機は、志願者が中学校在学中に内村鑑三『How I Became a Christian』、志賀重昂『日本風景論』、札幌農学校学芸会『札幌農学校』に接したこと、中学校の教師となっていた河村九淵、山田幸太郎、河南休男等の卒業生に影響されたことがみられた。学校案内冊子『札幌農学校』については、卒業生から農学校の紹介を受けた上で借用している場合もあり、各地の卒業生により推奨活動がなされていたといえる。

予修科入学へ向けた受験生活については、『官報』において「文部省内」とあった1900年の試験会場が、具体的には東京外国語学校であったことが分かった。また、1904年の無試験入学許可通知の内容と、許可の日付が明らかになった。

次に、東北帝国大学農科大学大学予科への志望動機については、新渡戸稲造の講話や校風への憧れがあったことに加え、中学校教師の紹介が挙げられている。その中には、清水元太郎・山田幸太郎のような卒業生だけでなく、東京外国語学校卒業生の細江逸記もいた。また、田中次郎と足立仁のように卒業生の子息が志願する場合もみられるようになる。そして、札幌農学校の近くで幼少期から過ごしてきた生育環境を契機とする者も現れた。

大学予科入学へ向けた受験生活については、中学校を卒業した3月から入学試験のある7月までが本格的な受験勉強期間であることを、回答記事と当時の資料から確かめた。その期間に上京して予備校で過ごす者がいた一方、早々に来札して青年寄宿舎に入舎する者もいた。また、『官報』の入学許可者発表について、1907～1911年が成績順の掲載であることを回想記事の上で確認した。

今後、受験雑誌や中学校校友会誌の受験体験記等の資料調査を進めて志望動機と受験生活の記事を収集し⁶³⁾、中学生、中学校教師、予備校講師等が予修科と大学予科をどのように捉えていたのか探ることを課題としたい。

【注】

- 1) 「札幌農学校校則」第21章予科規程、第177・178条（『札幌農学校一覧 自明治三十年至明治三十一年』1899年1月、47頁）。
- 2) 「札幌農学校校則」第4章入学在学及退学規程、第13条（『札幌農学校一覧 自明治三十年至明治三十一年』1899年1月、16頁）。
- 3) 「東北帝国大学農科大学規則」第2章大学予科規則、第1・3条、『東北帝国大学農科大学一覧 自明治四十年至明治四十一年』1907年12月、40頁。
- 4) 「東北帝国大学農科大学規則」第1章農科大学学則、第3節入学在学退学規程、第2条、『東北帝国大学農科大学一覧 自明治四十年至明治四十一年』1907年12月、31頁。
- 5) 拙稿「札幌農学校予修科に関する一考察」『北海道大学大学文書館年報』第14号、2019年3月、31～78頁、および拙稿「東北帝国大学農科大学大学予科の入学者選抜試験」『北海道大学大学文書館年報』第15号、2020年3月、27～76頁。
- 6) 『北大百年史』部局史、ぎょうせい、1980年3月、8頁。出典は、鈴木限三「何故札幌に来たか」『北海道帝国大学新聞』第116号、1933年10月17日、3面。後に『白壁校舎の新しきころ』新樹社、1970年10月に所収。
- 7) 『北大百年史』通説、ぎょうせい、1982年7月、131頁。
- 8) 『北大百年史』部局史、ぎょうせい、1980年3月、8頁。
- 9) 山本美穂子「札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活——学業・遠友夜学校・ロシア文学」『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月、2頁。
- 10) 社団法人札幌同窓会の会員は、「旧札幌農学校ヨリ北海道大学農学部ニ至ル全卒業生及ビ全科選科終了生及ビ農学実科林学実科及ビ農林専門部及ビ農芸科ノ卒業生」（「社団法人札幌同窓会定款」第6条、『札幌同窓会誌』復刊号、1966年12月）であり、その中には、札幌農学校予修科や東北帝国大学農科大学大学予科を経た本科卒業生が含まれている。
- 11) 「予修科入学願書（一袋）」（札幌農学校簿書766-04、北海道大学大学文書館所蔵。以下同じ）。
- 12) 「会員ノ住所職業」1897年12月末（『札幌農学校同窓会第六回報告』1898年2月）、「会員ノ住所及職業」1899年2月末調査（『札幌農学校同窓会第七回報告』1899年2月）による。

- 13) 「会員ノ住所職業」1895年12月末現在（『札幌農学校同窓会第五回報告』1896年12月）および「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十一回報告』1901年2月）による。
- 14) 「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十二回報告』1901年9月）、「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十四回報告』1903年5月）による。
- 15) 「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十二回報告』1901年9月）、「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十四回報告』1903年5月）による。
- 16) 鈴木限三「なぜ札幌に来たか」（『北海道帝国大学新聞』116号、1933年10月17日）。『白聖校舎の新しきころ』（新樹社、1970年10月、185～188頁）所収。
- 17) 鈴木限三「札幌の風景」（『圏谷』2号、1936年）。『白聖校舎の新しきころ』（188～202頁）所収。
- 18) 鈴木限三「白聖校舎の新しきころ」（『北海道帝国大学新聞』231号、1940年4月30日）。『白聖校舎の新しきころ』（212～216頁）所収。
- 19) 高倉新一郎「解題」（『覆刻札幌農学校』北海道大学図書刊行会、1975年12月）は、本書が北海道に遊学しようとする者の案内書として編まれ、刊行翌年に再版、4年後に増補3版と版を重ね、「札幌農学校の名はこの書によって天下に知られるに至ったといっても過言ではない」と述べる。
- 20) 「会員住所職業及氏名」1900年1月末（『札幌農学校同窓会第九回報告』1900年1月）および「会員ノ職業」（『札幌農学校同窓会第十一回報告』1901年2月）による。
- 21) 「故岩谷讓吉君小伝」『札幌同窓会第二十八回報告』1913年7月。
- 22) 「北見の砂金鉦」（『読売新聞』1899年9月15日付朝刊2面）、「又々北海道に砂金鉦を発見す」（『読売新聞』1900年4月7日付朝刊2面）、「北海道金鉦発見」（『読売新聞』1901年9月10日付朝刊3面）、「北海道金の採取増加」（『読売新聞』1902年10月15日付朝刊3面）、「北海道金鉦の調査」（『読売新聞』1903年6月14日付朝刊7面）、「金堀沢の金鉦」（『読売新聞』1903年8月25日付朝刊4面）等。
- 23) 浅田政広「『北海道金鉦山史研究』綱要（補遺）——金政策の変遷と北海道の金鉦山」『経済学研究』第49巻第4号、2000年3月、105頁。
- 24) 『中学世界』第5巻第6号、1902年5月10日、230頁。なお、『萬朝報』の記事は管見の限りみあたらなかった。
- 25) 『官報』1900年5月3日付、13頁。
- 26) 『東京外国語学校一覧 自明治三十二年至明治三十三年』1901年12月。
- 27) 毎年の無試験での入学者数については、前掲注5）拙稿「札幌農学校予修科に関する一考察」、39～40頁参照。
- 28) 「札幌農学校校則」第21、予修科規程、第178条（『札幌農学校一覧 自明治三十七年至明治三十八年』1905年1月、53頁）。
- 29) 『官報』1904年5月9日付、23頁。
- 30) 前掲注29) 『官報』1904年5月9日付、23頁。
- 31) 「入学志願者名簿 明治三十七年五月 教務部」（札幌農学校簿書1015）。
- 32) 「大学予科入学願書 合格ノ分 明治40年7月」（帝国大学期簿書0167、北海道大学大学文書館所蔵。以下同じ）所収「学業履歴書」。
- 33) 「故清水元太郎君を追憶す」『札幌同窓会第六十六回報告』1942年12月、19～22頁。
- 34) 『百年史 北海道札幌南高等学校』北海道札幌南高等学校、創立百周年記念協賛会、百年史編集委員会、1997年、740頁。
- 35) 「大学予科入学願書 大正四年七月」（帝国大学期簿書0175）所収。
- 36) 「故従四位勲五等足立元太郎君略歴」（『札幌同窓会第二十七回報告』1912年12月、3頁）。
- 37) 「大学予科入学願書 大正六年七月」（帝国大学期簿書0179）所収。
- 38) 『20世紀日本人名事典 あ～せ』日外アソシエーツ、2004年7月。

- 39) 『東京外国語学校一覧 自明治三十九年至明治四十年』1906年11月、101頁。
- 40) 「英語教育上記臆すべき札幌農学校」『英語世界』第2巻第4号、1908年4月、25頁。
- 41) 秋月俊幸「校友会誌からみた札幌農学校の校風論」、前掲注7)『北大百年史』通説、615～616頁。
- 42) 「北海道庁立札幌中学校一覧 明治四十四年七月一日調」(札幌中学校校友会『校友会雑誌』第24号、1912年2月、274頁)。
- 43) 「本年の競争受験界」『中学世界』第15巻第12号、1912年8月、5～7頁。
- 44) 中島広吉「四月より七月まで」(札幌中学校校友会『校友会雑誌』第26号、1913年2月、127頁)。中島は札幌中学校を1906年に卒業し、大学予科を経て1913年2月当時は林学科第3年級在籍中であった。
- 45) 「資料 明治大学教育制度発達史稿(3)」『歴史編纂資料室報告』第10集、1978年3月、22頁および122頁。
- 46) 渡辺又次郎「東北帝国大学農科大学予科の受験に就いて」『中学世界』第19巻第13号、1916年10月、55～56頁。
- 47) 『官報』1903年4月30日付、告示欄、1頁。
- 48) 「二重志願について」(『中学世界』第18巻第4号、1915年3月、101頁)。複数学校の併願についての質問は、他に「越前中山生へ」(『中学世界』第11巻第11号、1908年9月、145頁)、「二個以上の入学出願」(『中学世界』第14巻第5号、1911年3月、171頁)にもみられる。
- 49) 『官報』1911年4月17日付、16頁。
- 50) 推察の根拠は、中林正六(農学実科1913年入学)の「試験官兼英語のリーディングは森本厚吉先生でありました」という回想である(「札幌追憶」『札幌同窓会誌』第4号、38頁)。大学予科と農学実科は併願が可能であり、試験問題も共通であった。
- 51) 前掲注5) 拙稿「東北帝国大学農科大学大学予科の入学選抜試験」、35～36頁。
- 52) 青年寄宿舎舎友会『宮部金吾と舎生たち 青年寄宿舎107年の日誌に見る北大生』(北海道大学出版会、2013年11月、334頁)にも、「高木亮(熊本)一在舎一九〇八・五～一九〇九・五」とある。
- 53) 前掲注52)『宮部金吾と舎生たち』、337頁。
- 54) 前掲注5) 拙稿「東北帝国大学農科大学大学予科の入学選抜試験」、31頁。この他に、田村常次郎(予科1917年入学)の受験生活について、拙稿「100年前の受験生活」(『北海道大学150年史編集ニュース』第5号、2020年8月、4頁)において紹介した。
- 55) 『官報』1910年7月15日付、彙報・学事欄、12頁。
- 56) 『官報』1907年7月31日付、彙報・学事欄、10頁。
- 57) 原田三夫『思い出の七十年』誠文堂新光社、1966年3月、2頁。本書の所蔵については、山本美穂子氏の御教示を得た。
- 58) 「退職者履歴資料、五、1、大正9」(北海道大学大学文書館所蔵)、93～94頁。
- 59) 前掲注57)『思い出の七十年』、「自序」2～3頁。
- 60) 前掲注57)『思い出の七十年』、29～31頁。
- 61) 前掲注57)『思い出の七十年』、1～2頁。原田三夫の志望動機と受験生活については、拙稿「原田三夫の予科入学」(『北海道大学150年史編集ニュース』第6号、2021年2月、4頁)において紹介した。
- 62) 杉山滋郎「戦前・戦後を駆け抜けた「科学コミュニケーター」原田三夫」『リテラポプリ』24号、2005年11月、2～3頁。
- 63) 現在、次のような資料を確認している。
 - 中島廣吉「四月より七月まで」(札幌中学校校友会『校友会雑誌』第26号、1913年2月)
 - 蝦夷の男子「札幌農大奮闘の記」(『中学世界』第20巻第12号、1917年8月)
 - 玄人生「北海道帝大の予科に就て 附入学試験準備」(『中学世界』第23巻第7号、1920年5月)
 - 村岡成人「北大受験記」(荘内中学会『荘内中学会報』第38号、1933年3月)

[後記] 本研究は、JSPS 科研費 JP 19 K14049の助成を受けたものである。
本文中に引用した『中学世界』（高崎商科大学・高崎商科大学短期大学部図書館所蔵）の閲覧に際しては、菅原亮芳・下山寿子両先生のご高配を賜ったことを記して謝辞に代える。

（ひろせ きみひこ／北海道大学大学文書館員）

付表1 『札幌同窓会誌』引用記事一覧 (札幌農学校予修科入学者)

入学年	著者名	記事名	巻号	出版年月	卒業学科	卒業年
1900	小池俊三	札幌農学校最後ノ卒業	復刊号	1966.12	本科	1907
1900	逢坂信忍	所感	復刊号	1966.12	農学科	1908
1901	吉田守一	札幌農学校と宮部先生	復刊号	1966.12	本科	1907
1901	橋本直也	私の思い出	復刊号	1966.12	農学科	1909
1903	柳川秀興	思い出草	復刊号	1966.12	農学科	1909
1903	鈴木限三	札幌農学校のなつかしさ	復刊号	1966.12	農学科	1910
1904	加藤木保次	遠い昔の思い出	復刊号	1966.12	農学科	1910
1905	松田友良	思い出	第2号	1967.12	農学科	1911
1905	吉田武郎	札幌農学校から東北帝国大学へ	第3号	1968.11	農芸化学科	1911

備考) 「卒業学科」・「卒業年」欄は、1907年が札幌農学校の本科、1908年以降が東北帝国大学農科大学の各学科の卒業を表す。以下、付表2も同様。

付表2 『札幌同窓会誌』引用記事一覧 (東北帝国大学農科大学予科入学者)

入学年	著者名	記事名	巻号	出版年月	卒業学科	卒業年
1907	中島広吉	農科大学第一回予科生	復刊号	1966.12	林学科	1913
1907	滝山三馬	思い出のまま	第4号	1970.3	農学科第一部	1914
1908	高木亮	溝淵先生を偲ぶ	第2号	1967.12	農学科第二部	1914
1908	茅原太治郎	思いでるまま	第2号	1967.12	農学科第一部	1914
1909	堰八愛勲	つれづれなるままに	第2号	1967.12	林学科	1915
1909	岸本屯	追憶	第4号	1970.3	農学科第一部	1915
1910	服部正相	思い出づるまま	第2号	1967.12	林学科	1916
1910	田中次郎	学生生活の想出	第3号	1968.11	農学科第三部	1916
1911	福山伍郎	札幌遊学 半世紀の思い出	第2号	1967.12	林学科	1917
1911	西田近太郎	ライオンクラス	第2号	1967.12	農学科第一部	1918
1912	板垣信之	その頃の学徒たち 強情な弘前の人	第2号	1967.12	畜産学科第一部	1918
1912	小林直材	尽きぬ思い出と感謝	第4号	1970.3	畜産学科第一部	1919
1913	大沢正之	札幌農学校と神中	復刊号	1966.12	林学科	1919
1913	沢田徳蔵	むかしの丘珠	第2号	1967.12	農学科第二部	1919
1914	田中勝吉	alma mater 北大農学部思い出	第2号	1967.12	林学科	1920
1914	北村義重	恵迪寮懐古	第3号	1968.11	林学科	1920
1914	西佐久一	北大とのかかわり —明治—大正—昭和の八十年—	第6号	1980.12	農学科第二部	1920
1915	加納瓦全	昔を偲んで	第2号	1967.12	林学科	1921
1915	小笠原亀一	在学当時の思出	第2号	1967.12	農芸化学科	1921
1915	村越信夫	あこがれの札幌	第3号	1968.11	農学科第一部	1921
1915	足立仁	古い時代を顧みて	第3号	1968.11	農芸化学科	1921
1916	北島敏三	同窓生の思い出	第4号	1970.3	農芸化学科	1922
1917	権平昌司	エルムの森の思い出	復刊号	1966.12	農学科	1923
1917	須藤直吉	久闊の札幌行とクラーク訓話の討究	第3号	1968.11	農業経済学科	1923